

江戸時代の外交政策を(1)政策という。江戸時代の海外との交流の窓口は、長崎口、(2)口、(3)口、薩摩口の4つであった。長崎口では(4)と中国(明のち清)と、(2)口では朝鮮と、(3)口ではアイヌ、薩摩口では(5)王国と交流していた。

18世紀後半になると、(4)にかわって、東アジア世界に進出したのはイギリスだった。このころ、ロシアは不凍港を求めて(6)政策を進め、18世紀なかばには、千島列島から(7)(現在の北海道)にまで南下した。そして1792年、(8)を根室に派遣し、漂流民(9)の送還とあわせて日本に通商を求めた。幕府は拒絶したが、長崎での交渉を約束した信牌をにたえて帰国させた。

対外的にも難題に直面した幕府は、千島列島を調査させ、1799年に東蝦夷地を直轄地とし、海防を強化した。1804年、ロシア使節(10)が信牌をもって長崎に来航し通商を要求すると、幕府は拒絶した。これをきっかけに、ロシア船が蝦夷地沿岸に出没したため、幕府は、1807年に蝦夷地全域を直轄地とした。さらに、翌年(11)に樺太を調査させた。1811年に幕府がロシア軍人(12)を監禁すると((12)事件)、翌年、ロシアも択捉航路を開拓した(13)を抑留したために、両国間の緊張は高まるが、(13)の努力で(12)も釈放され事態はひとまずおさまった。

また、1808年にイギリス船(14)が長崎湾に侵入する事件がおこった。目的は、本国がフランスの統治下にあったオランダの海外活動拠点を占領することだった。

各地の沿岸に外国船が頻繁に姿をみせはじめた。幕府は鎖国を堅持するために、1825年、沿岸に接近した中国以外の外国船を容赦せずに撃退せよという(15)を出したが、不安は高まる一方だった。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15